



乾いた風が吹いていた。僕がそのガソリンスタンドに自転車をとめると、Perfumeがうたう「スウィート・ドーナッツ」が大音量でながれていた。悪くない。僕はPerfumeが好きなのだ。

「山田」

思わず、相棒の山田がそばにいるような気がして、声にだしてしまっただが、僕は今、自転車で旅をするチャリダーだった。山田はいまごろ、名古屋の事務所にいるだろう。僕はガソリンスタンドの店員に声をかけた。

「パフュームっていいですね」

「あ？」

「僕は、パフュームのみんなの声にエフェクトがかかっているところが好きだな。人の声だって、加工できる。声だって、プログラミングできるんだ」

「あ？ チャリダーがなんのようや」

「ガソリン満タンで」

僕が笑顔で自転車をみせると、店員はまるでパフュームの歌声そのままに無機質に「ムリ」と言った。ロボットのような声だった。僕がしつこく、「ガソリンを満タン！」といい続けていると、愛想のわるい店員は中に戻っていった。その店員といれかわるようによってきた店長風のネクタイをしめた男性が丁寧におじぎしていった。

〈お客さま、申し訳ございませんが、自転車に、ガソリンを給油することはできません――〉

僕も、そんなことはわかっていた。それでも、僕はガソリンをいれてほしいと思っていたのだ。だから店長風の男性に「ガソリンをいれられないなら、何をいれてくれるんだ？」と詰め寄った。応答はない。

僕は立ち去った。乗っていた自転車は新潟を走っている途中だった。今日はこのまま仙台まで行くつもりだ。

――雨の国道を走りつづけているうちに、僕は雄たけびをあげていた。

「自転車にガソリンを給油できないなら、僕がガソリンを飲んでやる！飲んでやる！飲んでやる！」

いつしか僕は口をあけて、雨をのんでいた。雨はどこかで涙の味がして、しょっぱくて、それは泣きながら飲んだ酒の味でもあった。僕が最後に飲んだ涙の酒はいつだったろう？ それは一度しかなかったから忘れるはずがなかったのに、その一度が思い出せない。思い出せないことが、僕にはたくさんある。

頭上で雷が鳴りはじめた。あれがおちたら死ぬ。死ぬんだ。覚悟を決めた。命なんか惜しくないと笑った。その瞬間、背骨にそって雷が流れていった。そのときに、これがもう何度も繰り返し見続けてきた夢であることに、夢のなかで気がついたのだった。

「おはよう」

ビジネスパートナーであり、ルームシェアの仲間でもある相棒の山田がベッドの脇にたっていた。僕はいつも、起きた瞬間に夢と現実の区別がつかなくなる。自分はいまでも自転車で日本縦断をした大学生の自分であるような気がする。あの頃から変わったことはたくさんあった。「お前はかわったよ」と何人にも言われた。たしかに僕の枝は変わっただろう。けれど根っこは、ずっと変わっていない。僕は僕とずっと関係してきた。

「いまでも……本を愛するチャリダーだ！」

夢のつづきのように叫んでいた。山田が笑っていった。

「ヒロは、変わらないな」

「山田も山田だな」

「ヒロ、今日はなんの日か覚えてるのかい？」

「ん？」

僕は突然、すべてを取り戻したのだった。僕も山田も変わらないけれど、今は2004年ではなくて2015年だ。僕らは33歳だ。そうだ。今日は、仙台にカタリベ・ヤマヒロ本店がオープンする一日で、僕らは仙台のホテルに泊まっているのだった。

「ヒロと起業して、もう何年になるんだ……4年前に震災がおこったころの俺らは無力だったな。＜ビジネスと本と町＞をつなぐものを必死に探したもんだ……」

「山田、柄になくナイーヴだな。役者か」

「今日をむかえればそんな気持ちにもなるよ。震災から1年以上、答えがでなかったからなあ。3年前だったっけ。俺らがやっとみつけた答、それが、『もう一度、読書がかっこいい時代をつくる』というフレーズだったか」

山田がしみじみと言った。すでに山田は着替えているのに僕は気がついて、自分も起きあがって顔を洗いに洗面所へ行った。山田はiPhoneでPerfumeの「スイート・ドーナッツ」をながしていた。

僕は山田がぼそぼそと呟いていたことを思った。たしかに僕たちは、東日本震災がおこったとき、震災どころではなかった。プログラマーとして、給料が保証されていたサラリーマンをやめて、山田と二人で起業したものの、その合同会社の行方がいまいち見えていなかった。たしかに山田は優秀なプログラマーとして業界に知られていたから、WEB作成に関する仕事依頼がなくなることはなかった。だが、僕は独立したプログラマーになるために起業したわけではないのだ。もっと、人と出会いたかった。その出会いに、“本”をからめる何か壮大なものを求めてきた。はっきりいえば、金よりも夢を追ってはじめて起業なのだ。

山田はPerfumeの「スイート・ドーナッツ」を延々とリピートしているようだった。

<電子レンジで 心の奥を 温めなおし 食べられるかな>

僕も鼻唄をうたいながら顔を洗って、スーツに着替えた。どうやらこの曲が山田だけでなく僕をもセンチメンタルにしていたみたいだ。たしかに、2011年の大震災が起こったころのヤマヒロは無力だった。あの頃は仕事が作業でしかなかった。でもいまはちがう。今日、僕たちは仙台にカタリベ・ヤマヒロをオープンさせるのだ。

山田ともどもホテルの朝食会場へむかった。ビュッフェ形式で、目の前には朝からたくさんのご馳走が並んでいる。

「味噌カツはないな」

僕がいうと、すかさず「朝からカツかよ」と山田のツッコミが入ったけれど、僕はそれをスルーして、「カツはないのに、鉄火巻きが朝からあるって不思議だな、東北も復興したもんだ」と返答して、鉄火巻きばかり皿にのせた。

そして僕は黙って、鉄火巻きを食べつづけた。山田も、朝からたこ焼きばかり食べていた。そのときに山田のiPhoneが鳴った。

「ヒロ、本の感想の朗読、昨日の夜中だけで日本中から300件登録されたぜ。これを全部聴くのって、つかれるし、こんな大変なことを、よく俺らはやってきたもんだよ」

「ああ、僕らはチャリダーだ」

「俺はチャリダーじゃねえ」

「比喻だよ」

僕は満足していた。昨日の夜中一日で、日本中の読書家たち300人が、自分のブログにかいた読書感想文を、朗読して音声にした。そして、僕らカタリベ・ヤマヒロに送ってきてくれたのだ。この音声を僕や山田、契約している古書店スタッフが一本ずつ聞いていく。

いくらネットが進化しても、僕と山田はこれまで、“生”にこだわってきた。僕たちがやっていく仕事は、パン工場のようなものにはしたくなかった。いつも、人を相手にしたい。そして、ビジネスとしての成立だけではなく、それプラスアルファで、世の中を繋げていく存在になりたい。

読書家たちの生声の感想朗読は、アナウンサーほどうまくないものだ。けれど、一人一人が自分の感想を声に乗せて集めたブックログは、絶対にあたる、と僕は信じてきた。すでに2011年のころから「本の紹介バトル」というものはあったけれど、僕はあくまでも「感想文の朗読」にこだわった。読書とは、孤独で地味な行為だ。みんなが明石屋さんまになりたいわけじゃない。だが、どんなに無口な人だって、感想を誰かに伝えたい気持ちはもっている。僕らは「対決」ではなく、地味な朗読を展開していく方法をとったのだ。

それが当たったのは昨年、2014年のことになる。読書家たちは、これまで自分が書いてきた10年分の読書感想文を、自分で朗読していくことを楽しんだようだった。なぜならパソコンで書きっぱなしにした感想をもう一度読み返す機会なんて、なかったからだ。それに声をだして10年前に書いた自分の文章を読んでいるうちに、またその本を読み返したくなるのだ。そのようにして、たくさんの朗読ファイルが日々僕たちの会社に届く。

世の中も、声を求めていた。今では、アマゾンに羅列される膨大なレビューを読むのにみんなが疲れている。本とちがって、本の感想は、声で聴いてこそ楽しいから古書カフェを開いている。そういうことをかつて若くして亡くなった名古屋のブックカフェの店主がいていたのを、僕は彼の遺言としてうけとった。

そういう経緯があって、僕らカタリベ・ヤマヒロは、肉声で集めた全国のブロガーからの読書感想文を、毎日スタッフと聴いている。地味でぼそぼそ話しているが、よく聴いてみるとすごく面白かったり、今は寝たきりで病室から動けないけれども「声だけは元気だから」と元気いっぱいの朗読音声は、その声だけでエネルギーのおすそわけになる。そういう声の語りを編集したカタリベ・ヤマヒロは、日本の読書界に新たな道を示したようだった。

「ヒロ、そろそろカタリベ・ヤマヒロ仙台店オープンに行こうか」

「うん」

ホテルの直ぐそばに出店されたカタリベ・ヤマヒロは、「東京R不動産」と連携している。大震災で倒産してしまった古い倉庫を利用したものだ。僕と山田は、朗読読書感想ブックの売り上げ利益をそのまま東北に投資することにしたのだ。

「ヒロ、東北の新スタッフたちへのスピーチ、準備はできてるんだろうな」

山田が僕の肩をたたいた。

「うん」

東北復興……。それは、名古屋人である僕らに関係があるかといえば、関係ないと言い切ることで可能だったろう。そして、東北復興、なんてあからさまに言い続けることは、周りからみれば偽善的にもみえただろう。本で東北復興や世の中を変えたいというたびに、周りのビジネスパートナーたちから「本で経済が活性するものか」といわれたものだ。

だが僕は確信している。人間は本来、遅いのだ。車より速く走れない。工場に必要なのは人間の筋肉よりロボットの鉄の腕だ。探し物もパソコンにかなわない。人間はコンピューターにたいして速度においてすべての点で負けてしまう遅い生物なのだ。インターネット社会が飽和したさきにくるのは、一冊の古い本、だと僕は考える。本を読んで情報に触れるという速度の“遅さ”と、たった一冊のためにかけられた無駄にしかみえない、なにもかもが、「だから、カッコいい」時代になるはず。

僕と山田のカタリベ・ヤマヒロ本店は、出身の名古屋ではなく、ここ仙台を拠点にしていく。報道とは裏腹になかなかスムーズに復興につながらない現実には、みんながつかれてしまったとき、僕らは本を届けたい。

このカタリベ・ヤマヒロ仙台本店では、早朝はビジネスマンと本を交えた朝活を、昼は町の老人たちの読書体験の朗読場に、夜はDJがプレイするなかで、みんなで酒をのみながら詩集をよむイベントを企画している。本ってカッコいい、の流れをつくるのは、僕たちカタリベ・ヤマヒロなのだ――



僕は、カタリベ・ヤマヒロ仙台本店の新スタッフへの挨拶を、頭のなかでくり返していた。そして踏み込んで、扉をおした。雷に打たれたかのような眩しい光に目があけていられない。

「あれ？」

「おい、ヒロ」

「ん？」

「いい加減、起きろよ」

「は？」

「いつまで寝てるんだよ。今日も打ち合わせが入ってるぞ。プログラミング講座の」

「は？ え？ 僕たち、仙台にいたんじゃないの？」

「なにいつてるんだよ、ヒロ」

「山田、ここは2015年だろ」

「2012年の10月だよ」

「僕は夢をみてたのか？」

「ヒロ……おまえはいつも、3層くらいの夢をみてるよなあ……」

山田のiPhoneから、Perfumeの「スウィート・ドーナッツ」が流れていた・

僕は起き上がって、がっくりした。目の前に、カタリベ・ヤマヒロ東北本店が広がっているはずだった。それなのに、今は2012年。僕らは30歳だというのだ。

だが……今日はいつもとちがっている。いつものデタラメな夢じゃない。僕ははっきりと手応えをつかんだのだ。

「山田……いまから味噌カツ食いに行こう」

「朝カツかよ」

「僕は……未来をはっきり、この目でみてきた……」